



わけではないとアートディレクターの著者は語る。むしろ常に新しい思考を生み出し続けるのがアート。アート思考とは、現代の社会に対して問いを投げかける力。問う力というわけだ。

例えば英国の覆面アーティスト、バンクシーにしても、競売会場で自作をシュレッダーにかけてみせることで、アートに「高い価格を付け、売り買いすること、人間は何を手に入れることができるのか」と広く問うことができた」と著者は推測する。本書は、未来社会を予言するよう

ていくのに、この本が少しでも助けになれば」

東大医学部時代、自分が医師として人の役に立つというイメージが持てず、医師国家試験に落ちたこともあり、卒業後は就職せずフリーターに。その後、批評家の東浩紀さんが立ち上げた出版社を経て医療情報サイトを運営していたが、やはり医師になろうと平成29年に医師免許を取得、30年から医師として働く。本書は2冊目の翻訳本で、自身の2冊目となる著書も来月出版予定だ。

「出版の仕事に携わったのは本が好きだったから。これからたくさん読者を獲得し、世論にかかわっていけるようになりたい」

(平沢裕子)

◆ おおわき・いしづか
医師。昭和58年、大阪府生まれ。著書に『「健康」から生活をまもる 最新医学と12の迷信』、訳書に『健康禍 人間の医学の終焉と強制的健康主義の台頭』。

いえば、北京で開催のオリンピック・パラリンピックもそうだろう。思えば昨夏の東京五輪も、コロナの影響が大きかったとはいえ、再開発の手段でない21世紀型五輪として、問いや新たな都市の仕組みを世界に提示できないまま幕を閉じた。

いま私たちは信号待ちのわずかな時間でも、手のひらのスマートフォンに「答え」を求めがちだ。データや数値は判断材料にはなるが、あまたの情報の中から本質をつかむ直観力や、これまでない発想はどう育まれるのか。教育の場でアートが求められる理由がみえてくる。

評・山寄一也

(芝浦工大特任教授)

気になる!



● Dr. Eggs ドクターエッグス① (三田紀房著、集英社・660円) 受験漫画『ドラゴン桜』



● 絶望 キャラメル (島田雅彦著、河出文庫・11078円) 舞台は財政破綻寸前の地



● 田舎はいやらしい 地域活性化は本当に必要か (花房尚作著、光文社新書・990円)

なった人もアの子供に制移送を伝に書かれたる場面が創41~44年

シベリアの俳句

シベリアに送られたのは日本兵だけではなく。第二次大戦中の1940年にソ連の侵攻を受けたリトアニアでは、著者の父や祖母を含む大勢の住民がシベリアへ送られた。飢えと寒さに苦しみ、亡く



極限の思想 ニーチェ 道徳批判の哲学

19世紀ドイツの哲学者ニーチェはキリスト教道徳を批判した。なぜか。そんな命題から出発し、実存主義の先駆とされる思想の核心に迫っていく刺激的な論考だ。同情や正義といった道徳的価値



は、人間にとも考えらそうした道徳のは、せめるという自

著者の新作は医療漫画だ。山形の医大に入った18歳男子の円は、成績が良いというだけの理由で医大を受けたくち。だが、入学早々に指導教官から「医師とは何か」を独特な手法で教えられ、医学部で頑張ることを決意する。円は学ぶべきことの多さに悩むも、着実に

方都市。そんな危機にひんした街を再生するために、破天荒な住職が白羽の矢を立てたのは4人の高校生だった。常人離れした肩を持つ帰宅部の男子は甲子園を目指し、美少女はアイドルとして地元をPR。微生物オタクの理系女子は海外留学に挑み、情報通の男子は

彼らのサポート役に。自分たちの潜在的な可能性を知った高校生は、街に奇跡を起させるのか?

住民の流出に悩まされる地方都市の現実が厳しい。だが、その絶望も噛み締めるほどに甘くなる。作家の批評精神とユーモアが光る風変わりな青春小説。

タイトルこそ強烈だが、決して田舎をばかにしたり、欠点をあげつらって非難したりする内容ではない。むしろ、本書が指摘したかったのは「都市を中心に置いていた過疎地域研究の問題点」だろう。その上で、従来とは異なる過疎地域対策を打ち出している。

著者は都心と田舎の双方で暮らした経験を持つ。だからこそ、過疎地域の問題点を冷静にあぶりだし、現場主義に基づかない活性化策に異論を唱える。「ブラック企業が標準の社会」と過疎地域を表現するなど、都会では分からない実情が書かれていて興味深い。